

# 基 点 「三つの中国」の時代

東京外国語大学 教授

中 嶋 嶺 雄

社会主義の全世界的な変貌という歴史の転換を前提に現在のアジアを考えると、一方では、東アジアに広がる中国的世界を無視することはできない。そして私は、この中国的世界が確実に「三つの中国」の時代になってきていることを指摘しないわけにはゆかない。最近までは中華人民共和国だけが中国で、それと競いあっているけれども、いまにも歴史から消えて行きそうな小さな存在としての台湾（中華民国）、そしてイギリスの植民地である香港——こういう図式で多くの人たちは中国的世界を考えていたといえよう。本年は日中国交二〇周年で、日中友好のセレモニーがいろいろ予定されているが、この二〇年間の日本人の中国認識もそのような図式に基づいていた。

ところが、これからの時代はまさに経済中心の時代であって、経済のサイズで考えてみると、中国、台湾、香港という「三つの中国」がほぼ拮抗して存在する現実が今後ますます無視できなくなる。人口をとれば、片や一二億の中国、片やその六〇分の一の人口二〇〇〇万の台湾、そして香港が多く見積もっても六〇〇万という大変な格差があるが、これを一人当たりのGNPで見ると、もつとも成績の良いのが香港の一萬二〇〇〇米ドル、台湾が九七〇〇米ドル、中国が平均三五〇米ドルで、膨大な人口を抱える中国は著しく落ちこんでしまうのである。

これを外貨準備高で見ると、台湾は飛び抜けて成績が良い。いまや九〇〇億米ドルで日本、米国を抜いて世界一という状況になってきている。貿易総額で見るとどうか。私はこれがもっとも重要な指標ではないかと思う。つまり、アジア地域でどのような形で物資や

資金が動いているかを即座に反映しているからである。一九九一年度の実績からこれを見ると、台湾の貿易総額は約一四〇〇億米ドル、香港は二〇〇〇億米ドル前後、中国がおよそ一三〇〇億米ドルだった。このうち香港の貿易総額が多いのは、とくに台湾からの輸入が急増しているからであり、そのうち大部分は大陸へ再輸出されているので、貿易総額から見るとまさに「三つの中国」がほぼ拮抗している時代なのである。

私たちは中国というと、いままでは中華人民共和国と「中華民国」台湾のどちらの中国を選ぶか、「一つの中国」とか、「二つの中国」とか、そういうことにあまりにも気をつかひすぎてきたけれども、現実にはこの「三つの中国」が相互に相補いながら、中国的世界を拡大していることにはあまり気づかなかった。その意味では、日本やアジアNIEsの経済発展にはかり目を奪われずに、中国的世界が現実にも相互浸透的に拡大している——とくに香港の影響は広東省に行き、台湾の影響は福建省に行っている——ことをももう少し重視して考えてよいのではないか。

また同時に、こうした状況のなかで、いかにこの「三つの中国」的世界を調和的にアジアの国際システムの中に受け入れていくかが、とくに日本にとっては重要な外交課題となるはずである。

日中国交二〇年は、同時に日台断交の二〇年だったが、これから二一世紀にかけての日中関係は、香港も含むこの「三つの中国」をいつも考慮していかなければならない。

日中関係も、このような中国的世界に対応した外交関係になっていくべきであろう。